

第22回日本臨床医療福祉学会

会 長 鰐 渕 昌 彦 (脳神経外科学教室 教授)



2024(令和6)年9月20日(金)、21日(土)の2日間、京都市のホテルグランヴィア京都にて、第22回日本臨床医療福祉学会を開催致しました。本学会の開催にあたり、助成いただきました大阪医科薬科大学医師会に対しまして、心より御礼申し上げます。

本学会は福島県にある南東北グループ総長の渡邊一夫先生が、高齢化と複雑化する社会の中でチーム医療・福祉の重要性を提唱され、2002(平成14)年10月13日に「日本神経疾患医療福祉従事者協議会」としてスタートしました。臨床・医療・福祉と多岐話題について議論

する学術集会ですの
で、リハビリテーション
医学教室教授の佐浦隆
一先生に副会長になっ
ていただきました(図
1)。



図1：閉会時の挨拶

(副会長の佐浦隆一先生) ホテルでの開催という



図2：ポスター 高台寺台所坂
(ねねの道より撮影)

こともあり、私のiPhoneで撮影した高台寺の台所坂を背景にポスターを作成しました(図2)。多職種から成る病院では、お互いをプロとして尊重し合い、各部署のプロたちが融合し、個々の立場を理解しながら上手く機能していくことで、総合的に良質な医療を提供できると考えており、「尊重と融合～相互理解の上に～」というテーマにしております。

医療に携わる職種全員が広く参加して、研究発表・意見交換を行うことができるように演題を募集しました。初日はオープニングセミナー、二日目の午前には医療講演、午後には特別講演を据え、オープニングセミナーでは麻酔科学教室教授の南敏明先生に「コロナ禍での病院管理－病院長として、麻酔科教授としての対応－」(図3)、医療講演では参議院議員(福岡県選出)、元財務副大臣である秋野公造先生に「保険診療への道」(図4)、特別講演は医療法人久幸会常務理事であり秋田大学元副学長、前整形外科科学講座教授の島田洋一先生に「リハビリテーション医療における先端機器開発と臨床応用－30年の経験と将来展望－」(図5)と題して、ご講演を賜りました。

南先生はコロナ禍に病院長を2期4年勤められ、2期目の時には私も副院長として仕事をさせていただきました。秋野先生は長崎大学医学部を卒業され、米国Cedars-Sinai Medical



図3：オープニングセミナー
黒岩敏彦先生(左)、
南敏明先生(右)



図4：医療講演
秋野公造先生(右)、
吉本高志先生(左)



図5：特別講演
島田洋一先生(右)、
佐浦隆一先生(左)

Centerへの留学、厚生労働省勤務を経て、2010(平成22)年より参議院議員と活躍されています。現在は3期目であり、財務副大臣、環境・内閣府大臣政務官を歴任され、ホウ素中性子捕捉療法(Boron Neutron Capture Therapy: BNCT)の保険適応に向け、尽力いただいています。島田先生は私の12年先輩の空手道部OBであり、大阪医科薬科大学赴任時一番にお祝いの電話やお花をいただき、今回の講演でも30年以上前に撮影した空手道部時代の懐かしい写真も提示いただきました。

ランチョンセミナーでは、柏木秀基先生(脳神経外科学教室助教)に「脳神経外科医が診る症候性てんかんとペランパネルの位置付け」と題して、最新のてんかん治療につき講演してもらいました(図6)。ランチョンセミナー座長は高見俊宏先生(脳神経外科学教室特務教授)にお願いしました。専門は脊髄脊椎手術ですが、大変上手くまとめていただきました(図7)。



図6：ランチョンセミナー演者
柏木秀基先生

シンポジウムは、①地域医療・働き方改革、②ポストコロナ・災害、③緩和ケア・リハビリ、④脳神経外科

疾患、⑤看護、⑥リハビリと6つのセッションとし、一般演題は、脳神経外科疾患、神経難病、がん、高次脳機能障害、失語、運動機能、嚥下、患者支援、働き方改革、教育、社会問題、医療経済に大別し、多岐にわたる内容で発表いただきました。学会事務局長の古瀬元雅先生(脳神経外科学教室診療准教授)が準備に奔走し(図8)、大変バランスの取れたプログラムが出来上がり、参加総数は267名と例年よりも多く、シンポジウム、一般演題、ポスター合わせて97演題で、ディスカッションも活発であり、盛会となりました(図9)。



図7：ランチョンセミナー座長
高見俊宏先生



図8：事務局長
古瀬元雅先生

私自身が会長として開催する初の全国学会でしたが、この度大阪医科薬科大学医師会から多大なるご支援を賜り、成功裏に学会を開催できましたこと、重ねて感謝申し上げます。



図9：終了後の集合写真 脳神経外科学教室、リハビリテーション医学教室、リハビリテーション科、緩和ケアセンター、医事課、広域医療連携センターの皆様

第38回日本小児脂質研究会

会 長 瀧谷 公隆
(医学教育センター 専門教授／小児科学教室)



2024(令和6)年10月26日(土)・27日(日)に大阪医科薬科大学本部キャンパス(新講義実習棟)で、第38回日本小児脂質研究会を開催いたしました。大阪での開催は、第17回(2003(平成15)年・玉井浩会長：本学小児科学教室 教授(現：名誉教授))および第36回(2022(令和4)年・斯波真理子会長：本学内科学Ⅲ教室 特務教授／循環器センター)を経て、3回目です。

本研究会は、先天代謝・内分泌・肥満・栄養・循環器・動脈硬化など多領域の小児科医、内科医、栄養士、基礎医学研究者などの多職種研究者・臨床家が小児の脂質代謝というキーワードのもとに参集しており、先生方は日々研鑽を積み重ねています(図1)。今回は、「次世代に繋ぐ小児脂質の臨床と研究」として、小児家族性高コレステロール血症のスクリーニングをテーマにシンポジウムを企画しました。

第38回 日本小児脂質研究会
～次世代に繋ぐ小児脂質の臨床と研究～

会期：2024年10月26日(土)・27日(日)
場所：大阪医科薬科大学 本部キャンパス 新講義実習棟 1F (P101)
(大阪府高槻市大学町2-7)
会長：瀧谷 公隆 (大阪医科薬科大学 医学教育センター・小児科 専門教授)
副会長：高谷 竜三 (大阪府済生会茨木病院 小児科部長)
学会HP：<https://cs-oto3.com/38jlca/>

特別講演：「オキシステロール受容体LXRと脂肪性肝疾患及び動脈硬化性疾患の病態との関連性」
横島 誠 (日本大学 医学部 生体機能医学系生化学分野 教授)

教育講演：「幼児肥満の現状と課題」
原 光彦 (和洋女子大学 家政学部 健康栄養学科 教授)

教育講演：「家族性高コレステロール血症の栄養療法と小児肥満の予防について」
恵谷ゆり (大阪母子医療センター 消化器・内分泌科 主任部長)

シンポジウム：「本邦におけるFHスクリーニング：実践と展望」
斯波真理子 (大阪医科薬科大学病院 循環器センター 特務教授)
岩島 寛 (中東連総合医療センター 小児科 副院長)
松永圭司 (香川大学医学部附属病院 抗加齢血管内科 学内講師)

社会講演：「家族性高コレステロール血症の患者が願う、子どもたちの診断と治療」
寺田栄志 (難治性家族性高コレステロール血症患者会)

若手優秀演題賞
口頭発表される若手発表者の演題の中から、「若手優秀演題賞」を選出いたします。
多数のご応募をお待ちいたしております。詳細はHPをご参照ください。

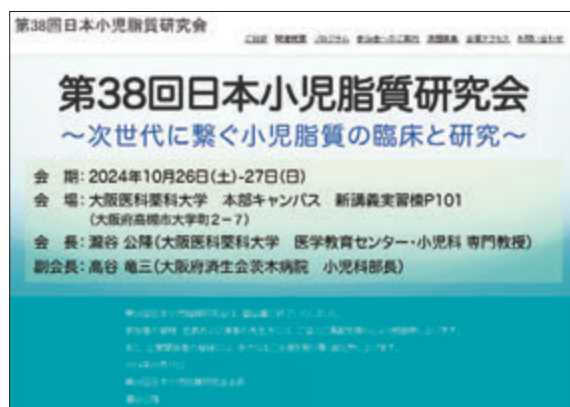
*26日(土)終了後には意見交換会(大学構内)を予定しております。

事務局：〒569-8686 大阪医科薬科大学 小児科学教室内 第38回 日本小児脂質研究会 運営事務局
担当：瀧谷公隆(たきたに きみか)
TEL: 072-683-1221 (代表)
E-mail: 38jlca@jlca-osaka.jp

図1：研究会ポスター

参加者は約60人で、一般演題は11演題でした。特別講演として、榎島誠教授(日本大学 医学部 生体機能医学系 生化学分野)に「オキシステロール受容体LXRと脂肪性肝疾患及び動脈硬化性疾患の病態との関連性」をご講演いただきました。教育講演として、恵谷ゆり先生(大阪母子医療センター 消化器・内分泌科)に「家族性高コレステロール血症の栄養療法と小児肥満の予防について」、原光彦教授(和洋女子大学 家政学部 健康栄養学科)に「幼児肥満の現状と課題」をご講演いただきました。また、Meet the Expertのセッションでは、本学小児科循環器グループの小田中豊先生に「青年期におけるRH-PATを用いた微小血管内皮機能評価の意義と今後の展望」の演題で、ご講演いただきました。セミナーでは、山本幸代先生(産業医科大学 小児科)には「新薬登場による新たな可能性：小児家族性コレステロール血症ホモ接合体に対する治療Update」、多田隼人先生(金沢大学附属病院 循環器内科)には「家族性高コレステロール血症に対する遺伝学的検査と治療戦略2024」をご講演いただきました。

今回のトピックスとして、FH(家族性高コレステロール血症)を早期発見・治療に結びつけるスクリーニングを取り上げました。そこで、難治性家族性高コレステロール血症患者会代表の寺田栄志様に「家族性高コレステロール血症の患者が願う、子どもたちの診断と治療」をお話いただき、我々は非常に感銘を受けました。FHスクリーニングシンポジウム：「本邦におけるFHスクリーニング：実践と展望」では斯波真理子先生(本学内科学Ⅲ教室 特務教授／循環器センター)に概論を、松永圭司先生(香川大学 抗加齢血管内科)、岩島覚先生(中東遠総合医療センター 小児科)にそれぞれの地域の取り組みをお話いただきました。さらに本研究会では、菊池透運営委員長が初めて、FHスクリーニング



第38回日本小児脂質研究会ホームページ
<https://cs-oto3.com/38jlca/>

を勧奨する宣言「高槻宣言2024」を発出しました。今後、FHの早期発見・治療のシステムが構築されることを望みます。

今年度より、学術総会において発表される若手発表者の演題の中から、「若手優秀演題賞」を選出しました。合計4演題の応募があり、いずれも甲乙つけがたい発表でしたが、西岡克文先生(香川大学 小児科)が、「小児FHヘテロ接合体の遺伝子バリエーションと薬物治療反応性の検討」のご発表で受賞されました。

非常に天候も良く、全国各地から先生方が参加され、小児脂質研究に関する意見交換が活発に行われ、盛会裏に無事終了いたしました。また、1日目の夕刻に、本学職員食堂で開催した懇親会でも活発な意見交換が行われました。最後に本研究会の立案・運営にご協力いただいた斯波真理子先生、小児内分泌グループ(高谷竜三先生・黒柳裕一先生・宮河祐治先生)および秘書様に感謝いたします。最後になりましたが、多大なご助力をいただきました大阪医科薬科大学医師会の皆様にこの場を借りまして、深く御礼申し上げます。

第15回日本皮膚科心身医学会

会 長 森脇 真一（皮膚科学教室 教授）



2025(令和7)年1月26日(日)、本学医学部学Ⅰ、学Ⅱ講堂において第15回日本皮膚科心身医学会を当科で主催させていただきました。私にとって教授就任16年目、今回で8回目の全国規模の学会主催になります。

この学会は皮膚科心身医学に関わる幅広い専門領域の皮膚科医が集い情報交換をする場として創設された会です。大会テーマは「Beyond Borders ～皮膚科心身医学の裾野をひろげる～」といたしました(図1、2)。私自身、専門は光皮膚科学、遺伝性光線過敏症であり、当初は皮膚科心身医学を全く知らない皮膚科医でした。ただ、日常業務の中で患者家族に実施していた遺伝カウンセリングを通じて、皮膚科心身医学の重要性を感じ本学会に入会させていただ

いた経緯があります。近年、アトピー性皮膚炎、円形脱毛症など多くの皮膚科疾患において、悪化因子としての精神的ストレスの関与、治療の際の心身医学的アプローチの立ち位置が注目され、診療ガイドラインにも記載されるようになり、傾聴、コーチングスキル、SDM(共同意思決定: Shared Decision Making)などが皮膚科実臨床の場でも重要視されてきています。「Beyond Borders」には皮膚科心身医学の重要性を知らない特に若手の皮膚科医へも裾野を広げること、皮膚科という垣根を取り除いて、皮膚科以外の先生へも皮膚科心身医学の存在を知っていただくこと、さらには臨床心理士、看護師など医師以外のスタッフとの交流も大事ではないかという思いを込めています。

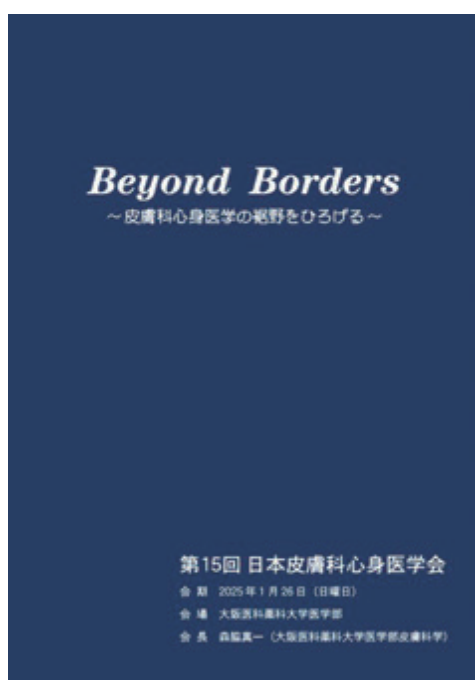


図1: 学会ポスター



図2: 学会ホームページ

本大会には寒い中早朝から招待者を含めて、北は旭川から、南は長崎まで総計102名のご参加をいただきました。特別講演では佐々木恵雲先生(藍野大学学長)に、人生のエンディングでの究極の心身医学ともいえる「死生観」についてお話いただきました(写真1)。佐々木学長は内科医であり僧侶でもあり、私が医学生時代から親しくしている同期でもあります。教育講演1では当科の福永淳准教授が、最新の各種皮膚科診療ガイドラインにおける心身医学の立ち位置を詳細にご紹介しました。また教育講演2では、心理学がご専門で、本学において長年医学生メンタルヘルスケアを展開されている澤村

律子先生(大阪医科薬科大学保健管理室)に、近年増えてきている医学生のメンタルブレイクへの取り組み、対応をご紹介いただきました。特別講演、2つの教育セミナー、4つの共催セミナー、バーチャルケーススタディー、一般演題いずれも活発な質疑応答が展開されました(写真2)。

多くの企業からの広告掲載もいただき、大阪医科薬科大学医師会をはじめとする団体からの寄付もあり、1日というタイトなスケジュールの中、運営面でも内容的にもご参加の皆様にご満足いただけたのではないかと考えております。



写真1：佐々木恵雲学長による特別講演の全景



写真2：澤村先生による教育講演での質疑応答